

---

# マジックワールド。魔法の世界へようこそ

ケン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

### 【Nコード】

N7088Y

### 【作者名】

ケン

### 【あらすじ】

これは突然、魔法の世界に来てしまった少年、如月集の波乱万丈な物語である。

## プロローグ

「は、最悪。理科の点数が50点ってやばいわ」

一人の学生服を着た少年が悲壮感を漂わせながら歩いていた。

彼の名は如月集<sup>きさらぎしゅう</sup>

とある高校に通う高校一年生である。

ちなみに今日は考查返却日であり

全教科が帰ってくるという地獄の日であった。

「は、余裕ぶっこいてたらまさかの計算ミスで  
十点落とすとかほんまないわ、しかも

数？も計算ミスで十五点落とすし、ほんま最悪」

しかし少年の顔はそんなに気にしていなような顔だった。

「ま、いつか。興味無いし」

この少年はある出来事により物事全てに興味が消え失せ気分で物事をこなし、

勉強も良い点を取ったら親が喜ぶので

頑張ると言う事だった。

とは言ってももうその親も去年に事故死した。

「……………帰る」

「ただいま、って言っても誰もいないから言っても意味ないか」

集はブレザーをかけて制服のままベッドに横たわった。

集の家はとても人が住めないような部屋だった。

さらにこの家の家賃は破格で借りる人が相次いだ

借りた人は全員1か月も経たずに引っ越したという

曰くつきの一室だった。

「は〜しょうもないな〜この世界。何かいいこと無いかな〜  
いや、それよりも今の生活は普通すぎるから刺激がほしいな。  
例えば・・・このまま寝て起きたら別のい世界に  
いたりとか！良いな、それ！・・・な事ねえか。寝よ寝よ〜」

集はそのまま目を閉じ10分後には熟睡してしまった。  
自分の言っていたことが現実になるとも知らずに。

## プロローグ（後書き）

こんばんわ。初めまして。ケンと申します。

一次創作を書くのは初めてです。

今まで二次創作をやってきましたので。

これから、よろしくお願いいたします。

## 第1話 目が覚めたら魔法の世界！？

「ん？今何時だ？」

集が時計を探そうと手を動かすがその時計が見当たらなかった。

「ん？何でないんだ？それにこの感触・・・草か？」

不思議に思い目を開けると・・・

「な、何ここ」

周りは草ばっかりで集の部屋ではなかった。

「ここどこ？・・・ま、いつか。

興味無いしな。一回散策するかな」

集は一旦、周りを散策する事にした。

「ほんとなんなん？ここ」

散策してみたがあまり情報は得られなかった。

すると後ろに何かの気配がして振り向いてみると

「・・・」

よく絶世の美少女を見ると目が離せないと

クラスメイトが言っていたがその事がようやく

分かった。その姿は赤い服に黒いマントを

はおり腰には刀を差しており

髪の毛は肩にピッタリと切りそれられていて

なお且つきれいな黒髪だった。

「あ、あの少女」

集が言いかけた時突然、その少女は刀を抜き

切りかかって来た。

「ひっ！」

集は慌てて横に避けるとその刀は切り返され  
首に向かってきた。

「うわああああ!!」

集は恐怖のあまり腰を抜かしてへたり込んでしまった。

そのお陰で何とか刀は髪の毛を少し掠るぐらいで避けれた。

「!!!!!!」

その少女は驚いたような顔をしたがすぐさま

冷静になり集に向けて刀を振り下ろそうとするが

「.....」

集と目が合い数秒固まった後に刀を下ろした。

「は、はは。よ、良かった」

「すまない。どうやら君は違ったようだ」

「え、何が？」

「いや何も無い。立てるか？」

「ん〜無理ですね。手を貸してくれませんか？」

「ああ、良いとも」

「すみません」

集が少女の手に触れた瞬間、集の頭に映像がよぎった。

『.....か?』

『.....さ.....ず.....る』

ひな、何これ?何で女の子が泣いてる?

何でそんなに悲しそうな顔をしてるんだ!〜

その映像は画質が粗く音も

割れすぎていてほとんど聞こえなかった。

「大丈夫か？」

「え?あれ？」

先程の映像が急に消え普通の景色に戻った。

「あ、ああ大丈夫です」

「そうか、すまないな。急に襲ったりして」  
「い、いえ別にそんな」  
「所で君はどここの者だい？あまり見ない顔だが」  
「へ？どこって日本人ですけど」  
「ニホンジン？そんな国あったか？」  
「は？いや日本ですよ？日本」  
「何を言ってるんだ君は？ニホンジンだとかニホン  
だとか不思議な言葉を使っているが」  
「す、すみませんがここはどこで、何て言う場所ですか？」  
「何を言ってるんだ？ここはユートリスで  
この地域一帯はコラリスではないか。  
本当に大丈夫か？」  
集は困惑していた。何せ聞いたこともない地名が出ていたのである。  
「ユートリス？コラリス？何じゃそりゃ。……」  
ま、いつか。向こうの世界も飽き飽きしてきたし。  
「ここは受け入れるか」  
「す、すみません。最近ここに来たもので」  
「ふむ、そうか……。所で名は？」  
「ああ、そうでしたね。僕の名は  
如月集つて言います。貴方は？」  
「私は桜ゆえだ。よろしく頼む」  
「はい！」  
お互いに握手を交わした。  
「ひとますはその格好を何とかしないとな」  
「へ？あ」  
よく見ると集の制服は土だらけで元の色が見えてなかった。  
「私の家に行こう。すぐ近くだからな」  
「ええ、分かりました」

森を出るとそこにはたくさんの露店が立っており



人々の活気の言い声が聞こえてきた。

「あ、どうだい！その奥さん！このネックレスきれいだろ？」

「おばちゃん！頂戴！」

「へ〜結構広いですね」

「まあな。ここはこの地域では一番規模が大きいマーケットだからな。所で君はどこからきたんだ？」

「え、え〜っとですね。まあ、遠い所から」

「そうか、長旅で疲れて寝てしまったのか？」

「ははは！〜そうなんですよ！」

「ならば宿にでも泊まれば良かったものを」

「じ、実は今お金が一文無し何です」

「一文無しとは何だ？」

「しまった〜ここは日本じゃないから

ことわざとかも知らないんだっ

「あ、いや僕の国の決まり文句でしてね。

お金が全くない事を言っんですよ」

「ほ〜初めて知ったな。今度詳しく教えてくれないか？」

「え、ええまあ」

「うむ。約束だぞ！」

ゆえはとてもきれいな満面の笑みで集に笑った。

「はい！」

集も満面の笑みで笑い返した。

「ここが私の家だ」

「へ〜結構大きいんですね」

「ふふ、まだ小さい方だぞ？」

そこには結構大きめの家が建っていた。

広い庭がありきれいな花や木々がたくさん生い茂っていた。

「あら、ゆえちゃん。御帰りなさい。

その隣の男の子は？」

「ああ、紹介するよ。この子はさつき森であった旅人の如月集だ。それでこっちが私の母だ」

「はじめまして。如月集と申します」

「ふふ、そんなにかしこまらなくても良いわよ？

私はゆえちゃんの母の桜ゆいです。

よろしくね〜集君」

「はい、よろしくお願ひします」

「ま、ひとまず中に入ろうか」

「あ、はい」

「上がって頂戴」

ひとまず集は客室に案内された。

「ひとまず集。体を流してきたらどうだ？」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「そんなに畏まらなくていいぞ？」

「え、あじゃあ、分かった」

「ああ。シャワー室はそこを右に曲がった突き当りだ。タオルなどは後で持って行くよ」

「ああ、ありがとう」

「覚悟はしていたけどお風呂じゃないか〜」

集が入った場所はお風呂ではなくただ単にだだっ広いシャワーだけの浴室みたいなものだった。

そこで、集は一応体を洗い貸してくれたタオルを使い、服も借りた。

「ああ、上がったのか。集」

「ああ、ありがとう。さっぱりしたよ」

「まあ、座れ」

「うん」

「ではまずは君の話詳しく聞かせてもらおうか？」

「へ？何の事？」

「惚けない方がいい。私の勘は良い方だな。」

君はこの・・・いやこの世界の人間じゃないんだろっ？」

「！！！！！！！！」

「凶星か」

「うん」

「話してくれないか？何か力になれるかもしれない」

「分かった。話すよ」

それから集は今までの事を話した。

自分は異世界から来た者で日本という国の事など

「そうか。つまり君は異世界から来たという事で良いかな」

「うん。ま、気にしてないけど」

「元の世界に戻りたくないのか？」

「何で？」

「何でって君が今まで過ごしてきた世界なんだぞ？」

そして突然目を覚ましたら異世界って怖くないのか？」

「興味無いね」

「何？」

「僕は別にどうなるのが興味無いよ。そこで起きたことに関しては僕は全部無条件で受け入れるからな」

「・・・何があつたんだ？」

「・・・何もなかったよ。何もね」

そっつ集の目は悲しそうな顔をしていた。

「そっつ言えば集はこんなのを見た事はあるか？」

「ん？」

するとゆえが突然、手のひらから炎を出した。

「……………へ〜」

「むむ？感動すると思ったんだがな。これも興味無いのか？」

「ああ、無いね。全く」

「そう言いながらもお前、ガン身だぞ？」

集は炎を近くでまじまじと見ていた。

「……………凄いな。僕にも出来んのか？」

「分からないな。君はこの世界の住人ではないからな。

この世界では幼い頃からこれを勉強してるらな」

「それって魔法なのか？」

「ああ、魔法だよ」

「……………教科書あるか？」

「ああ、あるがどうするのだ？」

「見せてくれ！！俺もマスターしたい！」

その目はきらきらしていた。

「い、良いぞ。後ろの書庫に大量にあるから見ていいぞ」

「よし〜！」

そう言い集はダッシュで書庫に向かった。

「あら？集君は？」

「集なら書庫に行ったよ」

「あらそう。折角おいしいパンを作ったのに」

「まあ、後で分からなくなっ出てくるさ。

その時に食べさせよう」

「そうね」

そして夜〜

「お〜い。集、大丈夫か〜入るぞ〜」

ゆえが入るとそこには…………

「何をしてるんだ？」

「……本の海で泳いでる」

本の山に埋もれた集がいた。

「それよりも晩御飯だぞ」

「ああ、悪いな」

集はゆえに連れられ晩ご飯を食べ  
また書庫にこもり一日を過ごした。

**第1話 目が覚めたら魔法の世界！？（後書き）**

こんばんわ。連続更新です。

如何でしたか？

感想もお待ちしております。

それでは、さよなら

## 第2話 目覚めの時 Wake up!!!

「ん〜いい朝だ。さてと起きるk」

ゆえが起きようとした時、庭で大爆発が起こった。

「な、何だ!？」

「ご無事ですか!？お嬢様!！」

「ああ、私は大丈夫だが何が起こったんだ？」

ゆえが執事に尋ねた。

「分かりません!庭の方であつたみたいですが」

「私が行く」

「・・・お気をつけて」

「ああ」

ゆえは黒いマントをはおり刀を持って庭に出た。

「・・・切つていいか？」

「だ・・・め・・・に・・・きま・・・てんだろ」

そこには黒焦げになつた集がいた。

「一体何をしたらこんな大きな穴を開けるんだ？」

「いや〜実はさ、昨日書庫の本、全部読み終わったからさ。

俺も魔法を試してみようと思つてさ」

「あの書庫には数万冊の本があると言われてるんだぞ!

それに君はまだこの世界の言葉を知らないんじゃない!！」

「だからまずは文法の本から読み漁った。本読むの好きだし

読む速さも自信あるし。最後には

なんだっけ?だ、だい」

「大魔法全書か？」

「そう!それを読み切つてやったら爆発した」

「どれどれ・・・!!!!」

ゆえが見たページには賢者クラスと書いてありそこには炎の最大魔法が記されていた。

「流石に最大魔法はきついな」

「集。君はどれからしたんだ？」

「それだけど？」

「は、死ぬ気か。まずは初級魔法からだろう」

「ああ、そうだな。よし！いくぜ！」

集が手のひらを返すと炎が出たことには出たが音だけがデカイ音爆弾みたいな魔法だった。

「うおー！」

「ぶむ。炎はダメと、よし次だ！」

「お、おう！次は水だ！」

もう一度出すと今度は大洪水のような大量の水が溢れ出しゆえに直撃した。

「ぶっ！」

「あ、わ、悪い。ゆえ。だいじょうぶ……ぶ……か？」

ゆえは怒ったかのように体から炎を出し水分を飛ばしていた。

「次だ」

「は、はい」

低い声で脅された。

「っ、次は」

「君はある意味凄いな」

「……………」

ゆえの真下にはぼろぼろになった集がいた。

「雷を出せば感電し、自然を使えばつるが自らを縛り無機を使えばがらくたが出て、肉体強化を使えば豚みたいなデブになった」

「仰る通りです」



「つまり君は今のところはどの属にも属してはいない」  
「でも、まだ属はあるぞ」

「闇と氷だな。だが闇に関しては魔族のみが使える  
氷に関しては机上の空論だ」

「あゝ最悪だゝ」

「集よ」

「何ゝ？」

「学校に行ってみてはどうだ？」

「は？学校？」

「ああ、そうだ。学校に行けば詳しい原理などが学べるぞ」

「でも、俺が行けるのか？」

「どうしてだ？行きたくないのか？」

「そりゃ行きたいけど学費とかがだな」

「ああ、それなら大丈夫だ」

「何で？」

「私の父は騎士隊の隊長だからな」

「騎士隊って？」

「騎士隊とはその名の通り民間を護るために結成された」

その騎士隊はどの人物も名だたる魔法使いがいるんだ」

「ふゝん。興味無いな」

「まあ、良い。それでどうする？行くか行かないか」

「……………行く」

「よし！ならばさっそく準備に取り掛かろう！！」

それから忙しかった。

まずはゆえの父に了承を得るために会ったり

服を取りそろえたり等など色々な事をした。

そして……

「ふああああゝ」

「おいおい、本当に受験生か？集」

ゆえと集は学校の前にいた。

「ここが」

「そうだ。ここが私を通つてる

シルバロン魔法高等学校だ!!」

そこには真つ白な建物に闘技場のようなもの。

それに寮の様なものやさらにはお店までもが完備されていた。すると二人の前に一人の女性が突然現れた。

「うお!!」

「はじめまして。貴方が如月集君ね？」

「はい」

「私は今日一日貴方の試験官を務める

フィーリ・ブリュッセルだ」

「よろしくお願いいたします」

「ああ、よろしく頼む。早速会場に行こうか。

桜さんも来るが良い」

「はい!」

二人はフィーリに連れられて試験会場に案内された。

「まずは今日一日の日程を説明する。

まず、この編入試験は一日を通して行われる。

まずは一次試験の筆記テスト。次に

二次試験の身体能力を計るフィジカルテスト。

最後に魔法戦闘を見る実技試験だ。質問は無いかな？」

「はい」

「よし、なら始めよう」

「がんばれよ!集」

「ああ、任せろ」

こうして集のテストは始まった。

一次試験：筆記テスト  
「結構難しいな。でも、基本を応用にしてあるだけだから解けない事は無い」

二次試験：フィジカルテスト

「このテストでは攻撃魔法を避けてもらうぞ。自分の魔法は無しだ」

「了解」

「では、始めるぞ!!」

合図とともに次々と魔法が放たれた。

炎の玉や雷の弓の様なもの、

水を周りに敷いて雷を全体に通すものなど

ハイレベルな攻撃が行われた。

「はい。そこまで！次でラストよ…」

と言いたいけど昼休憩よ」

「りよ、了解」

休憩室

「お疲れさまだな。集」

「ああ」

「しかし貴様は避けるのだけはピカイチだな」

「そうか？」

「ああ。ここの入試試験はかなり厳しいものだ。

そして編入試験はさらに厳しいものだと言われている。

私もやったが一回は当たってしまったぞ」

「偶然だよ。偶然。じゃ、そろそろ行くわ」

「ああ、行って来い!!」

「お疲れ様。これで最後よ」

「はい」

「内容は私と全力勝負よ」

「了解」

「さっきの試験でこの人の攻撃は

大体読めた。あとは」

「言っとくけどさっきの試験の魔法はかなり手加減したから」

「!!!」

「本気で来ないと」

「フィーリは手に炎を纏わせ地面を殴った。

すると…」

「ま、まじで？」

「地面が大きくへこんだ。

先程の試験では全く傷すらつかなかったものが。

「死んじゃうわよ？」

「ひい!!!」

最終試験が始まった。

別室」

別室でゆえが二人の勝負を観戦していた。

しかし、その内容はフィーリが圧倒的に有利な状況だった。

「まずいな。今の集はまだ魔法をキチンと使えていない。」

それに自分にあつたものも未だに分からない」

ゆえが考えていると後ろから何人かの人物がやって来た。

「お〜お〜やってるやってる」

「珍しいな。貴様らが見に来るとは」

そこには5人の少女と1人の少年がいた。

「別に良いでしょ？ 私達も見に来たいときもあるわよ」  
金髪で露出度がかかなりきわどい少女が話した。

「いい加減貴様のその破廉恥な服はやめろ。目に毒だ」

「あら。それでもスタイルは抜群よ」

金髪の少女が言うとおりの腰はかなりくびれており  
胸もかなり大きく顔も整っており  
軽く化粧をしていた。

「ゆえ……正解……貴方……凄く……破廉恥」

「貴様も貴様だな」

今喋った少女は緑色の髪の毛に

身長は少し低めできれいというより

可愛いという言葉がぴったりだった。

「彼……噂……人物」

「ああ、そうだ。彼は」

ゆえが言いかけた時少年が口をはさんだ。

「如月集。生年月日・身長・体重・年齢と共に

不明な少年だ。おれでも名前しかわからなかった」

「へこの国一の情報通と謳われるあんたでさえ

分からないなんてね。ミステリアスで良いじゃない」

少年は服にかなりのチェーンを巻きつかせ動かたびに  
じゃらじゃら言っていた。

もう一人の少女は青い髪の毛をしていた。

「……………」

何もしゃべらない少女は黒髪で腰ぐらいまでの  
長さの髪をしていた。

「なあ、何であいつ魔法使わねえの？」

「私…不明…回答…要求」

「ああ、集は、そのだな」

「魔法が使えない、いやまだ眠っているのか」

「………！！！！！！！！！！」

その場の空気が一気にピリピリしたものに変わった。

「へへ貴方が来るなんてね。今日は大雨の日かしら？」

「悪いが俺は雨男ではない」

この少年は髪の色が6色に分かれていた。

「何故その事を？」

「何となくだ。貴様らも感じているんだろ？未だ

感じたことのない気配を」

「………！！！！！！！！！！」

「まあ、その内、面白くなるさ」

「はあ、はあ」

「どうして魔法を使わないの？」

「さあね」

「余裕をこいてる訳でもなさそうね。

まあ、良いわ。これでフィニッシュよ！！」

フィーリは左右の手から炎を出した。

「ねえ、知ってるかしら？水を急に熱するとどうなる？」

「水蒸気となり気化されるだろ？」

「そう。でもその水蒸気って結構」

「！！！！！！！！！！」

「気付いたようね。でも、遅いわ」

フィーリは巨大な爆発を起こし一気に水を気化させた。かなりの熱を持った水蒸気を発生させた。

「集!!」

その光景を彼女たちも見ていた。

「あゝあ。残念。フィーリ先生の得意技来た」

「あれは未だに完全に防げる気がしないぜ」

「私…同感」

「終わったわね。帰ろうかな」

三人の少女達が帰ろうとした時

「待て。これからだ」

「「「?????」」」

「さあ、見せてみる。お前の魔法を」

「あちゃ〜やりすぎちゃったかしら?」

フィーリはのんきに考えていた。

「でも、これであの子は…??」

突然フィーリの体が震えた。

「寒!!それに息が白くなるほど気温が下がってる

……まさか、彼がこれを?」

フィーリは集を見つめるとそこには

「う、嘘でしょ」

巨大な氷がそこにはあった。

第2話 目覚めの時 Wake up!!! (後書き)

おはようございます!!ケンです!!  
如何でしたか?

今日確認したらアクセス数がまさかの14でした。

確認したとき、まじで?と思いました。

まあ、二次創作とは違って一次創作は

ヒットしにくいですからね

感想もお待ちしております!!

それでは



### 第3話 全てを凍らす者

「ここはどこだ？」

集は浮遊感を感じていると

頭の中に声が響いてきた。

『ふむ、貴様が呼んだのか？』

「誰？」

『私は氷の魔法の……まあ何だ、そう言う事だ』

「全く分らないんだけど？」

『つべこべ言うな。で？どうする？』

「何が？」

『貴様は氷魔法の力が欲しいか？』

「氷？氷魔法は確か机上の空論だけ？」

『違うな。その昔大きな魔法戦争があった事は知っているだろう？』

「うん、まあ？」

『そこでその戦争を止めた英雄はだれだ？』

「確か炎、雷、水、闇、無機、自然の魔法使いじゃなかったけ？」

『そうだ。だがそれは口伝え故に一つ消えた属性がある』

「それが氷？」

『そうだ。さあ、どうする？このまま死ぬか』

奴を倒し合格するか！！選択するんだ！！』

「僕は……合格するんだ！！合格してこの世界で

楽しく過ごすんだ！！だから力を！！』

『良いだろう！』

「こ、氷？」

「あいつ何をしたんだ？」

「氷の魔法は存在しないんでしょ？」

「……………」

「不明…実際…目の前…起こってる」

「見る！氷が砕けるぞ！」

ゆえが叫ぶとともに氷が砕け現れたのは…

「集なのか？」

白い髪の毛に変化した集が立っていた。

「そ、そんな氷の魔法は存在しないんじゃないか！」

「……凍れ」

集が地面を蹴ると共に辺り一帯が凍り始めた。

「ああ、もう！！」

フィーリは自然の魔法で大木を出現させそれを足場にして空中に飛び上がった。

「空気は凍らせられないでしょ！！」

「ふん、なめんなよ」

集の足もとが凍りだし氷柱となり一気に伸びて近づいた。

「う、嘘！！」

「空中では動けないよね？」

集が空気を叩くように振舞うとフィーリを巻き込み凍った。

「どうだ？」

しかし、氷が突然割れ一人の男が現れた。

「ん？貴方は？」

そこには六色の髪の毛の色をしている少年がいた。

「すまないな。割り込む気はなかったんだが今の君は

危険すぎるため、割り込ませてもらった」

「じゃ、じゃあ試験は？」

「合格でよろしいですね？フィーリ先生」

「ええ、文句の言いようがなく合格よ」

「よっしゃー！！！！」

喜んだ瞬間、集は気を失ってしまった。

「ん？ここは」  
「目が覚めたか、集」  
目の前にゆえがいた。  
「うん、でもここは？」  
「ここは」  
「ここは保健室よ！！」  
「「？？」」  
後ろからドアが蹴り破られたかと思うと五人の少女が出てきた。  
「え、えつと誰？」  
「ああ、紹介しよう。まずは破廉恥娘だ」  
「誰が破廉恥娘よ！！私の名はライカ・サイトよ！！」  
ライカで良いわよ！」  
「は、はあ」  
「じゃあ、次は私ね？」  
私は水識ラナよ？ラナで良いよ？」  
「ど、どうも」  
「私…名前…フォレル・シンラ。」  
…フォレル…良い」  
「な、何故に片言？」  
「昔かららしい」  
「……………」  
「ほらあんたも挨拶、挨拶」  
……………」  
黒髪の少女がライカに耳打ちした。  
「大丈夫だって！さあ、早く」  
「わ、わた、私の」

黒髪の少女が名前を言いかけた時、集が突然頭をなで出した。

「ふえ？」

「そんなに怖がらなくても良いよ。」

僕は君を拒絶なんかしたりしないから」

「…うん！私の名前はルーラ・ダークって言うの！！  
ルーラで良いよ！！」

「珍しいわね」

「確かに、ルーラが初対面の人に怖がらないとは」

「ねえ、集君だっけ？」

「はいそうですが？」

「何で君はあの時なでたりしたの？」

「何となく僕と同じような気配がしたから」

そう言った途端、集は顔を悲しそうに背けた。

「そう。深くは追求しないわ。これからよろしくね？」

「ええ」

「これで集も私達と同じ学校か」

「一緒のクラスになれたらいいな」

「そうですね。それでいつから何ですか？」

「ああ、今は長期休暇だから恐らく登校は長期休暇明けだな」

「そっか、楽しみだね！集！！」

「ですね。ルーラさん」

「もう！ルーラで良いよ！！」

「癖だね。まあ、一週間もすれば治るよ」

「そっか、じゃ、そろそろ帰ろうか？」

「だな。では集、帰ろうか」

「うい」

理事長室へ

「ふむ。この子が例の」

「はい」

「で？どうだったかな？机上の空論の氷魔法は」

「はい、実際戦ってみて応用性、破壊力ともに

目を見張るものがあります。しかし、まだ彼は発現させて

日が浅い為に威力にむらがありました」

「ふむ」

「それに試験が終わった後、気を失うほどまでに  
疲労していました」

「そうですね。ですが将来性はあると」

「はい」

するとドアがノックされた。

「どうぞ〜」

「失礼致します」

先程の六色の青年がやって来た。

「相変わらずカラフルな髪の色ですね」

「そうですね。染髪してもすぐに抜けちゃいますので」

「それで、どうでしたか？」

「はい。過去の文献を徹底的に漁ったところ

やはりある時代の所で意図的に氷魔法の

文献が消されていました」

「そうですね。それでその時代は？」

「魔法革命時代です」

「そうですね…」

「どうなさいますか？」

「ん〜今は観察という事にしておきましょう」  
「分かりました。失礼致しました」

「如月集君か。楽しみだ」

その顔はまるで子供のような純粹な笑顔だった。  
実際子供の様な姿だが

「あ？」

「どうしましたか？理事長」

「いや、今子供と言われたような」

「気のせいでは？」

「だな」

続く……………

### 第3話 全てを凍らす者（後書き）

こんばんわ！ケンです！

いや〜一次創作は難しいですな〜

今日アクセス数確認したらまだ、51人でした〜

まあ、まだ連載しだして二日目ですからね〜

これから増えて行く事を祈っています。

それよりも如何でしたか？

次回で集が学校に編入致します。

それでは、感想もお待ちしております。

さよなら〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7088y/>

---

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

2011年11月22日02時30分発行